
少女Aと少女Bのある放課後

長月十萌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少女Aと少女Bのある放課後

【Nコード】

N7522X

【作者名】

長月十萌

【あらすじ】

ある日の放課後。少女Aと少女Bのお茶会は、その日少女Aの1つのカップルの話から始まった。

注文したオレンジジュースをストローで啜った少女は、目の前でストイックな銀のハーフフレーム眼鏡を天井から吊るされた灯りで僅かに光らせ黙々と読書をし此方を忘れている存在に、「そういえばさア」と少しだるそうに、語尾を延ばして言葉を投げた。それを受け取ってくれるかは、五分五分の可能性ではあつたけれどまあいいやと割かし適当に思いながら。眼鏡の少女は手元の本から視線を僅かに上げて頬杖しからん、とオレンジジュースの氷をかき混ぜて音を鳴らした彼女に、面倒臭そうに　だが割かしその声色は読書を邪魔されたという怒りなどなく、言葉を返した。反応してきたそれに少女は退屈から解放されたとばかりに目を細めれば、艶やかな薄いオレンジのリップを塗っている唇をふるんと震わせ言葉を紡ぐ。彼女からは柑橘系の匂いがよく漂ってくる。化粧品でも入浴剤でも、喉が痛いといつては舐める飴も。レモンやオレンジの柑橘を彼女はよく愛用している。時々アップルなどのクリームを使ったりしているから、用は果物などが好きなのだろうけどどうでもいいことだ。

「2組の斉藤君、エリと付き合って一ヶ月じゃん」

「そうだったかしら」

「そーだよ。で、昨日ユミと高戸が軽くお祝いでもするかーって話したんだよね」

「そう。したらいいじゃない」

「うんそうなんだけど、ちょっと話聞いてくれるならちゃんと聞いてよ」

「はいはい。で、斉藤君と田中さんのそれがどうだった?」

「そうそう。ユミと高戸がお祝いするって話になって、そんであた

しがさあ二人にメールしたんだよ。一ヶ月だから軽くお祝いしない
ー？て。まあ一ヶ月記念だし二人で祝うならそれはそれでよかつた
んだけど」

「そうね、大抵二人で祝うでしょうし」

「そう？まあどうでもいいんだけど。そしたら二人とも三日前に別
れたからいらないうて」

「別れたなら仕方がないじゃない」

「そう仕方ないんだよ。でもあたしら知らなくてさ、ユミと高戸に
『別れたって』って言ったなら「なんで確認してないの」ってユミが
軽くぶつくさいって。そしたら高戸も記念日近いのに別れたかなん
ていえるか？って怒っちゃって」

「…まさか？その二人も別れたの？」

「ううん。逆。ぎゃあぎゃああいつてたらなんか変な方向に転がって
告白しあって付き合いだした」

「……何、そのくだらない話」

「くだらないよね。あたしだけ置いてけぼりなの」

酷いでしょ、とオレンジのリップを鞆の化粧ポーチから取り出した
少女は、手鏡を片手に軽く唇に当ててすつと横へ線を引くようにし
塗って行く。眼鏡の少女はそれを横目で眺めれば、そんな話かと興
味をなくしたように再び本へと視線を落とした。だが今度は少女も
それには構わないらしく、リップをポーチにいれて片付ければメニ
ュー表へ手を伸ばしデザート部分に指を滑らせた。爪はなにもされ
ていない。少し伸ばしっぱなしになっていて、何かの拍子で割れた
ら痛そうではある。怒りで拳を握れば中々痛いかもしれない位の、
長さ。

「別れる人あれば付き合う人あるのよねえ」

「貴方だって居たじゃない」

「もう二ヶ月も前の話だよ」

「まだ二ヶ月前の話の間違いでしょう?」

「あたしの感覚じゃ違うの!...はあ、ユミが高戸好きとか、...聞いてないってばあ...」

「...何、貴方」

もしかして。銀のハーフフレームのレンズ越しに視線をやれば、少しでもだけ目元が潤んだ少女はオレンジのリップを塗ったばかりの唇で、「まあね」と小さく震えた声で、答えた。メニユー表で少しはなれた席で雑談するカップルから見えないよう壁をつくり、馬鹿でしようと。少女は笑った。

「...さあ...分からないわ」

「ひどい、なあ。失恋したんだよー、なんかないの?」

「ないわよ。貴方本当に好きな人には、何も言えないのよね。普段は友達がライバルでもアタックしてお互いすつきりしてけじめつきたい、とかいってるのに。ほんととは知ってたんでしよう?高戸君、前島さんのこと、」

「わかってても、さあ。チャンスはあるって、おもっちゃうじゃん...?」

「...そうね。でも、貴方は馬鹿よ。どうせお幸せに、とか、ひゅーひゅーなんて古典的に祝ってあげて、一ヶ月記念も三ヶ月記念も、半年や一年の記念日、祝うつもりなんでしよう?」

「.....うん」

「まあ、三ヶ月記念日辺りには貴方にもいい人ができて、今度は...幸せになれるんじゃないかしら」

「...そ、かなあ」

からん。オレンジジュースの氷が音を立てる。眼鏡の少女はすっかり冷めてしまったブラックコーヒーに手を伸ばすと小さく音を立てぬよう囁り、カップを受け皿に戻した。

「そうよ。…多分そろそろ動くでしょうし」

「え？」

「なんでもないわ。ああ、そうだ。この漫画面白かったわ」

「あ、読んだ？じゃあ博次に返しておくわ。感想多分聞かれるから適当に考えておいてくれる？」

「ええ。…そうだ、トモが貴方の見たがってた映画のDVD、昨日借りてたから明日声かけて一緒に見させてもらえば？」

「え！ほんと？わ、やった。ああじゃあメールしておくわ」

「ええ」

「あ、ね、」

「何？」

「…そつちにも多分三ヶ月後にはお幸せなお相手が居ると思うよ？」

「…だといいわね」

残りのコーヒーを飲み干し、眼鏡の少女は鞆を手に立ち上がる。漫画を仕舞い込んだオレンジの少女もジュースを飲み終わると立ち上がり、鞆を肩にかけて財布を取り出した。明日は一人でやってくるだろうとめぼしをつけた眼鏡の少女は、さりげなく手を貸した友人の恋路がうまくいくようおごりの少女の後姿を眺める。支払いをする少女は、信じていないだろう眼鏡の少女に思いを寄せている存在を脳裏に描くと、お互いに幸せになれてたら、このだからとした集まりもなくなるのだろうか、少し寂しげに思った。否、多分なくならない。タイプの違う者同士ではあるが、なんたって相手は、十年以上の幼馴染なのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7522x/>

少女Aと少女Bのある放課後

2011年10月20日02時12分発行